

井手恒雄著 「平家物語論」

笠, 栄治

<https://doi.org/10.15017/12304>

出版情報：語文研究. 15, pp.57-58, 1962-12-31. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

井手恒雄著「平家物語論」

笠 榮 治

『日本文芸史』における無常観の克服』に続く、井手恒雄氏の第二著である。無常観に真正面から取組まれた研究の成果が、三年前に氏の第一著として披露された時、それが将来氏の御専門である平家物語をめぐって、どう展開されるかが期待されたが、新しい思索のあとが今度の新著として提示されたのである。氏は「今日平家物語をどう読むべきか」という、唯一つの限定された課題を追求してみたいといわれる。はつきりした問題の設定で、特に専門外の人にも親しめるようにとの配慮がなされている。また、平家物語を貫くものは武士の精神であり、仏教的思想である——などと普通に考えられているが、その常識的見解の誤りを正すことを主要な目的とする由が述べてあるが、これが氏の平家物語論の立場でもある。全篇第二章からなり、第一章は、「平家物語と武士道精神」、第二章は「平家物語と仏教思想」である。綿密な論理の構成と氏の立場が明示された、首尾一貫した文芸的理論の書をなしている。

第一章、一、「三つの存知をめぐって」では、維盛、忠度らの出陣に際して「節刀を賜はる日家を忘れ、家を出づるとて妻子を忘れ、戦場にして敵と戦ふ時身を忘る」といわれる武士のモラルが祖

上に載せられる。そのようなモラル、所謂、武士的精神は、これまで文芸としての平家物語を支えるものと考えられて来たが、氏はそれを常識の誤りとして否定される。即ち、そのモラルと対立する恩愛の情そのものが平家物語の詩情を成すものであるとされる。武士のモラルと、それと対決すべき精神との矛盾が指摘される。

二、「君臣の道と『もののはれ』」では、「嗣信最期」と「扇の的」の悲劇を中心に論じておられる。氏は、この「平家物語と武士的精神」の章に於いて「今日必要なのは平家物語の武士的精神なり、仏教思想なりに対する『批判』である。」とお考えのようで、所謂武士道という宿命を負わされた武士における「人間性の積極的肯定」を追求し、そこに詩情を見出だそうとしたのが平家物語だといわれる。

第二章「平家物語と仏教思想」においては、平家物語を以って、仏教文学、唱導文学だとする今日までの通説を鋭く批判することを通じて氏の独自の見解が展開される。特に、福井康順氏の論（『文学』一九五九年一月二号）に反論され、一層はつきりと自説が提示され、数年来の論争が面白い。

一、「愛と無常觀のもつれ」においては、滝口入道の悲恋、平維盛の入水等の哀話が、「人生は無常であり、愛もまたはかない」という仏教的諦觀に対する人間精神の抗争の物語として把握される。それは、諸行無常という諦念のもとに「自分の恋愛をあきらめたり、最後に及んで妻子への愛着を押し殺したりしなければならなかった申世社会の人々の悲劇だとされるが、総じて言えば、平家物語を以って「仏教と人間感情の矛盾相剋」の書だとお考えのようである。それにひきつづいて、二、「無常觀か無常感か」として発展させられる。人生の無常を悟って冷たく諦らめるといふ仏教的発想が、真実「無常觀」であつて、それは誤つても「無常感」などと書かれる性質のものではないというあたり、氏の新説として注目されるべきものであらう。

従つて氏の立場よりすれば、平家物語における武士道なるものは、武士道精神という範疇を超える人間の感情、武士であるが故に従わねばならぬ運命的なものを背負つた人間の世界が論ぜられた。仏教思想は、仏教的無常觀の世界で、その枠外にはみ出る人間感情の様相が展開された。氏の論に従えば、平家物語は武士道の書、仏教文学の書ではなく、武士的精神、仏教的無常觀を超越する人間感情が、哲理の観念たる武士道精神、仏教的無常觀に対決し、相剋する時に生ずる詩情の世界であつて、武士道精神、仏教的無常觀の書とする従来の観方を否定されたのである。

それは、本居宣長の源氏物語論に見出される「ものあはれ」論的発想に、氏の現代人的立場が加えられて追求された平家物語の論である。氏の立場は、非仏教的なもの、非武士道的なものの設定に

ある。福井康順氏との論争もこの点に観点の差異をもつものである。氏の論の輪郭が今度の著ではつきりと描き出されたが、氏の論を支持する人々も、反論する人も、氏の論の発展を、今一度改めて見直す為の第二著で、再び、福井氏等との論争を予想させる。

(世界書院刊、二三三頁四〇〇円)